

## 【優秀賞】

## 夏の庭

西 美優羽（兵庫県 甲南女子中学校 3年生）

庭一面に燃えるように咲き誇るコスモス。読み終えたとき、主人公たちが見た風景が目につかんのだ。このコスモスは、まるで「生きる」ということを象徴しているかのようだ。「死」がテーマであるこの物語を読んで、私が考えたことは「生きる」この意味だった。

同じ小学校に通う少年、木山、山下、河辺は仲良し三人組。ある日、山下の祖母が亡くなったことがきっかけで少年たちは「死」に興味を持ち始める。そして「人が死ぬところを見たい」という好奇心から、近所に住む、今にも死にそうな一人暮らしのおじいさんを観察するようになった。夏休みの間、おじいさんの家に通ううちに、彼らの関係は少しずつ変化していく。少年達は、おじいさんの生活を心配するようになり、差し入れをし、ゴミ出しを手伝い始める。無気力だったおじいさんも、なぜか元気を取り戻し、自分で買い物や洗濯をするようになった。雑草だらけの庭の草引きをし、コスモスの種を植える頃には、彼らの距離は縮まり、お互い無くてはならない存在になっていった。もう「死ぬところを見たい」という目的は忘れてしまったかのように。

「死んでもいい」と思えるほどの何かを、いつかばくはできる

のだろうか。たとえやりとげることではできなくても、そんな何かを見つけないとばくは思った。そうでなくちゃ、なんのために生きてるんだ」

私達が生きていく中で、誰と出会い、どんな経験をするかは、その先の人生に大きな影響を与えると思う。木山のこの言葉は、それを物語っていると思った。それぞれ家庭に抱えている少年達と、戦争の暗い過去を背負うおじいさんの交流は、かけがえない宝物だったのだ。

人は決してひとりでは生きていけないものなのだと思う。普段の生活の中での友情や家族への思いやり、人との出会いや別れを繰り返しながら人として成長し、何かを感じ取ることが、「生きる」この意味なのかもしれないと思った。

そして夏休みも終わる頃、おじいさんは死んでしまう。少年達は、もつと生きて欲しかったと悲しみ、泣いた。そしてそのあと、死んだ人は戻っては来ないことを知ったのだ。「人が死ぬところを見たい」という目的で始まった夏休みの出来事は終わってしまったが、少年達は大人に近づいた。おじいさんは、充分立派に、めいっぱい生きてと納得し、自分もまた頑張って生きていく決意をすることが出来たからだ。

夏の庭は、彼らの心の中の風景なのかもしれない。最初は雑草だらけの寂しい庭だったが、少年達は知識や生活の知恵を教わり、おじいさんは人との触れ合いや生きる力を贈られることにより、心の中に種をまき、水をやり、成長して、花を咲かせたのだと思う。少年達が別々の道を歩き出したとしても、この夏の庭を一生忘れることはないだろう。そして、これからの人生に悩んだり、つまずいたりしたときに、きつとこの経験を思い出し、自身に問いかけてみるのだと思う。

誰にだって、いつか必ず死は訪れる。最後は灰になって消えてしまうのだ。「生きる」ことの本当の意味はまだよく分らないが、私は消えずに残るものもあると思いたい。だからこそ、今現在を精一杯生きることが大切なのだと思う。いつか、私の心の中の庭にも咲かせてみたいと思う。

風が吹いても、まっすぐ前を向いて咲く、鮮やかなコスモスの花を。

書名：夏の庭 The Friends  
著者：湯本 香樹実